

かみぶんのりやす

上分乗安遺跡

事業名 松山管内埋蔵文化財調査
(川之江三島バイパス建設埋蔵文化財調査)
委託者 国土交通省四国地方整備局
調査主体 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
調査場所 四国中央市上分町
調査期間 平成18年6月19日～平成19年3月30日(予定)
調査面積 6,659㎡(予定)
[上記の内、上分乗安遺跡の調査面積は5,859㎡]

上分乗安遺跡の調査概要

今回の発掘調査では弥生時代後期・古墳時代初頭～前期・古代(奈良～平安時代)・中世(鎌倉～室町時代)の遺構と遺物が見つかりました。

前年度に調査した1区に隣接する2c区では、奈良時代を中心に7世紀後半から8世紀にかけての掘立柱建物3棟を含む柱穴や土坑を検出し、1区検出のカマド付き竪穴住居と共存していることがわかりました。

2a区では13世紀後半から14世紀ころを中心とした鎌倉～室町時代の遺構が多量に見つかりました。今回の調査で見つかった掘立柱建物の柱穴は約1,100穴であり、1区で見つかった中世の柱穴を含めると約1,900穴に及ぶことがわかりました。出土遺物には中世土器をはじめ、銭貨(開元通寶)や青銅製容器の一部、鉄製品などが見つっています。このような成果から2a区を中心に比較的規模の大きい中世集落が

13世紀後半から14世紀ころに営まれていたことがわかりました。また見つかった柱穴群の中には、柱を抜き取った穴に土師皿などの中世土器を丁寧に納めていたものが30例以上見つっています。こうした出土状況は地鎮祭祀を行った結果と考えられます。

2a区から2c区にかけて弥生時代後期・古墳時代初頭～前期・奈良時代・平安時代に形成された10条にも及ぶ流路群を見つけることができ、各時代においてたくさんの土器が出土しました。特に古墳時代初頭～前期の流路では二重口縁壺など古式土師器が出土し、平安時代の流路では黒色土器や緑釉陶器、摂津型羽釜などが出土しています。中世には流路は埋まってしましますが、それ以前に営まれていた各時代の集落域は、この流路群によって東西に分断されていたことがわかりました。



今回調査した上分乗安遺跡の範囲



上分乗安遺跡で見つかった柱穴群と流路



柱穴に納められた中世の土師皿

地鎮祭祀とは何?

地鎮祭祀とは、その土地に宿る神々に土地を使用する許可を得て、生活の平安を祈念する儀式のことです。今回の調査で見つかった地鎮祭祀は、柱を抜いた後、穴の中に中世土器を納めていました。中世の地鎮祭祀は、建物を建てる時だけではなく、建物が使われなくなる時にも行われていたようです。

上分町地区(上分西遺跡・上分乗安遺跡)の発掘調査でわかったこと

今回の調査で6年間にわたって続いた上分町地区内での大規模な発掘調査は、ひとまず終了することになります。この6年間にわたる調査では総延長約500mにかけての範囲で縄文時代後期から中世に至る複合遺跡を多面的に調査することができ、各時代における歴史的景観の復元を可能にするような成果を挙げる事ができました。

そこでこれまでの調査成果を通史的に見ていくことにします。

縄文時代

縄文時代後期(今から約4000~4500年前)の縁帯文土器が上分西遺跡1・5~9・11区で出土しました。特に7区ではたくさん出土し、個体として復元することもできました。遺構は見つけることができませんでしたが、この辺りに縄文時代後期の集落があった可能性が高いと言えます。

弥生時代

上分西遺跡1区の包含層から簾状文と言う独特の文様が施された弥生時代中期の壺が出土しています。この文様は徳島県の吉野川流域や高知県南国市辺りの弥生土器に類例が認められます。後期に入ると上分乗安遺跡1区で細い溝が見つかりました。この溝の東側に後期弥生集落が広がっている可能性が指摘できます。また、このころに上分乗安遺跡2区で流路が形成され始めます。

古墳時代初頭~前期

上分乗安遺跡2区で数条の流路を検出し、古式土師器が出土しました。その中には岡山県や香川県で作られた土器も含まれていました。そのころ、上分西遺跡では5~9・11区で直径約70mの集落が営まれます。竪穴住居10棟をはじめ土坑や集石遺構、集落内を貫流する流路などが見つかりました。集落の縁辺にあたる6区では墳丘を持たない石槨墓が2基並んで見つっています。墓の主体部は135~140cm×35~40cmの木棺が考えられ、いずれも石(礫)で槨を作っていました。さらに2号墓では上面にも石(礫)を被覆していました。集落に隣接し墳丘を持たない石槨墓は類例に乏しく、県内に同じ墓制を確認することはできません。木棺や石槨の上面にも石(礫)を被覆する行為は香川県や徳島県の墓制の一部に共通するところがあり、被葬者の出自や墓制の地域性を考えるうえで興味深い資料です。

古代(奈良~平安時代)

上分乗安遺跡1区と2c区で奈良時代を中心に7世紀後半から8世紀にかけての掘立柱建物や竪穴住居が見つかり、円面硯や土馬が出土しました。官人(古代の役人)に関連する人たちの集落が営まれていたものと考えられます。2区では同じころの流路や平安時代(10世紀ころ)の流路が形成されます。

一方、上分西遺跡では8・9・11区を中心に10~11世紀ころの掘立柱建物が作られ、小規模な集落が営まれます。そしてその南側の1区では10世紀前後に埋没したと思われる流路が見つかり、緑釉陶器や須恵器などが出土しています。さらにその南側(2区)には低湿地帯が広がり、人の足跡や牛馬のひづめ跡が見つかりました。これらの足跡は10世紀以降と思われるが、そのころに周辺で牛馬を使った水田づくりが行われていたことが想像できます。

中世(鎌倉~室町時代)

このころには2区の流路群は完全に埋まってしまい、少なくとも4つのまとまりを作って中世集落が現れます。上分乗安遺跡では1区と2c区で13世紀前半ころ、2a区と3区では13世紀後半から14世紀ころに、そして上分西遺跡では4区で区画溝を伴って14世紀ころ、5~7区では14~15世紀ころの中世集落が営まれています。このように一連の発掘調査で13世紀ころから15世紀ころにかけて居住する場所を移動しながら集落が移り変わっていく様子がわかってきました。また出土遺物には香川県や徳島県で出土するものが多く含まれており、この集落の地域性を表しています。

まとめ

各時代を通して言えることは四国中央市の地域性の歴史です。中期弥生土器や古墳時代初頭の墓からは徳島県や香川県そして高知県との交流が、古式土師器では岡山県や香川県とのつながりが、古代や中世の土器からは香川県や徳島県との関連性が見つかりました。こうした考古学の調査成果は、高速道路をはじめとした情報と交通・物流の結節点である四国中央市の利便性は、現代に始まったものではなく、その始まりは遅くとも弥生時代にあり、連綿と現代まで受け継がれたものであることを物語っているのです。

柱穴内に納められた中世土器



重ねて納められた土師皿

(上の写真2枚は同じ柱穴の上下での出土状況)

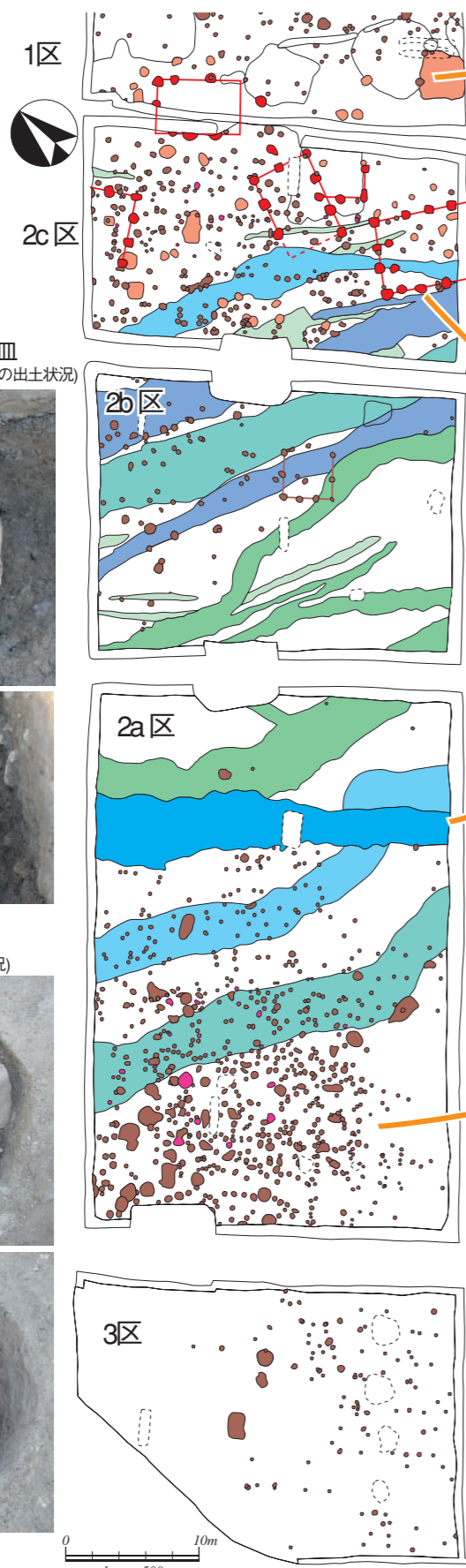


折り重なった土師皿

(上の写真2枚は同じ柱穴の上下での出土状況)



様々な埋納例



上分乗安遺跡2・3区遺構配置図



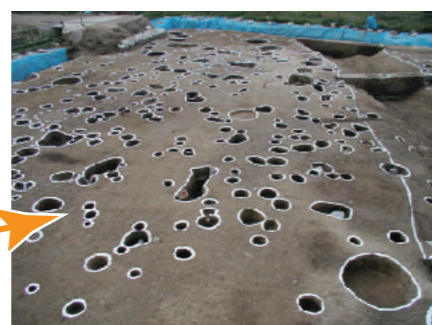
1区8号竪穴住居のカマド
(土師器を転用した煙道が見つかった)



2c区1号掘立柱建物



2a区で見つかった流路群

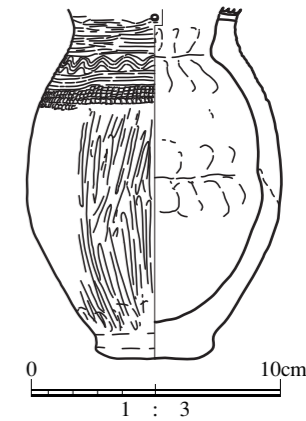


2a区で見つかった中世の柱穴群

- 7世紀後半~奈良時代の建物
- 7世紀後半~奈良時代頃の遺構
- 中世の遺構
- 中世の地鎮関連遺構
- 弥生時代後期~古墳時代初頭の溝・流路
- 古墳時代初頭の溝・流路
- 古墳時代初頭~前期?の溝・流路
- 7世紀後半~奈良時代の溝・流路
- 平安時代頃の溝・流路
- 時期不明の溝・流路



上分西遺跡7区出土した後期縄文土器



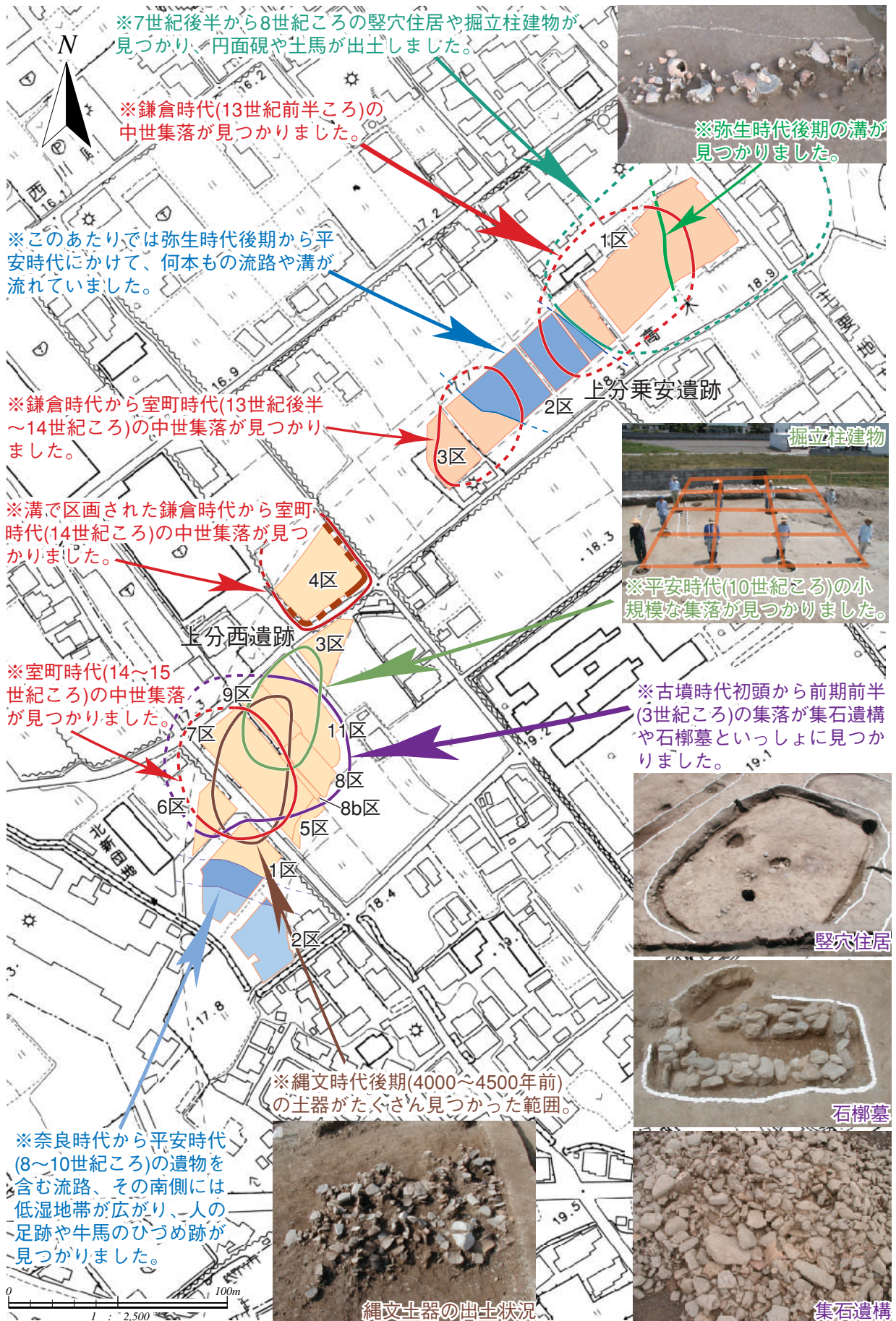
上分西遺跡1区で出土した簾状文が施された中期弥生土器



上分西遺跡6区1号石槨墓



上分西遺跡6区
石(礫)で被覆された2号石槨墓



上分乗安遺跡・上分西遺跡と歴史的景観の復元